「天声人語」の文章表現と思惟形式について

塩路三音子

序論

私達の言語活動には口頭によるものと記述によるものとがあるが、記述によるもの即ち文章によって表現されるものは、その相手の如何にかかわらず書く人個人の心的内容を一方的に表現する点において、口頭によるものより一層個性が表れていると見ることが出来る。だから文章の意味を個人的表現的意味としてとらえることが重要であり、現実に、ある主体によって表現された表現意識が、常に文章様式の基盤として考えられなければならない。

今までの国語学では、文字・音韻・語彙・文法に関しては古くから研究されて来たが、それらを総括したもっと全体的な「文章」については、ごく近年になって研究が進められて来たといってよい。つまり、従来は文章の礎となる一つ一つの小さなこと、例えば文字・音韻・語彙・文法等が重要な研究部門として尊重され、それに対して私達の生活に最も身近かな文章表現自体についての研究が、近年まで殆んど成されなかったのは全く不思議な位である。思うに「文章」というものがあまりに抽象的で、科学的研究のよりどころがつかめなかったからかもしれない。

しかし最近になって、日本でも文章研究が進み、文章心理学や文体論の研究により、私達が日常使用する「ことば」が大きくクローズ・アップされて来た。とはいっても思惟発展に基づく文章の発展形式の分野はほとんど未開拓である。元来文章は、書きことばでも話しことばでも、首尾一貫している場合とそうでない場合がある。どちらの場合も意味的に成立し得る場合には、必ず表現者の思惟がはたらいている。その思惟及びそれに即応する表現形式が一貫しているかどうかで、文章の首尾一貫性が決まるわけである。つまり思惟方法によって文章の発展形式は異なると考えられる。そこで、まだ研究の日が浅いこの文章の発展形式について、その一端でも掘り下げてみたいと思ってまとめたのが、この小論文である。

そこで、研究の対象としてえらんだのは、一寸風変りではあるが、「天声人語」をはじめとする新聞コラムである。何故対象を「天声人語」にしたかというと、今日ジャーナリズムが注目され、又それがマスコミとして私達に与える影響もまことに大きいわけだが、その中で、現代の文章で代表的なジャンルと思われる新聞の文体を研究する

ことは、時代に即して有意義だと考えたからである。

その新聞の文章の中から、現代の名文ともいわれ、特異な存在である「天声人語」をえらんだわけだが、大抵の人が必ず読み、政治家の間でも話題にのせられ、マンガの種にもされる変った存在である「天声人語」は、一体いかなる文章表現がなされているか、又何故に私達に興味深く読ませるのか。私達はふだん別に深く考えてみることもせず、書かれた内容だけを吸収しているが、そこには非常に興味深いものが潜んでいるのである。そこで新聞の典型的文章の一つであり、それ自身興味のある「天声人語」の文章表現と思惟形式について研究し、そこに見られる各種の様相や表現形態から、執筆者の思惟的な面へと考察を進めてみたのである。

「天声人語」というもの

「天声人語」は一口にいって、朝日新聞の朝刊に日曜から土曜まで毎日掲載されるコラムである。

朝日新聞に「天声人語」の欄が初めて設けられたのは、明治三十七年（一九〇四年）一月五日であるから、その歴史は六〇年位にもなる。はじめは大阪の朝日新聞だけであって、終戦後昭和二十年九月六日から東京のにも載せられるようになった。

初代執筆担当者は烏居素川氏、内藤湖南氏らで、次いで長谷川如是閑、土屋大夢、丸山侃室、原田粗一郎、安藤鉄腸の諸氏が筆をとり、永井荒葉氏に至ってこの欄の性格が定まり、黄金時代を築いた。永井氏が大正十三年から昭和十一年頃までおよそ十年間担当した後、窓治陸一氏はじめ色々頒ぶれがかわり、現在の荒垣秀雄氏が担当しはじめたのは昭和二十一年四月中旬からである。

現在の執筆者荒垣秀雄氏についての略歴は大体次の如くである。一九〇三年、岐阜県飛騨の山奥で生れた。大正十五年、早稲田大学政経学部を卒えて朝日新聞社に入り、社会部に十五年程籍を置いた。ジョージ六世の戴冠式でロンドンへ行ったり、社会部長、リオ・デ・ジャネイロ支局長、マニラ支局長等もした。戦後昭和二十一年から「天声人語」の筆を執るようになり、現在に至る。著書には「新聞の眼」、「新聞の片隅の言葉」、「喜怒哀楽」、「現代人物論」、「北飛騨の方言」、「戦後人物論」、「新日本の足跡」等がある。

ところで、「天声人語」は〃コラム〃と呼ばれている短評の一つで、毎朝朝日新聞の第二面に載せられる。一日平均八百乃至九百字位、六十行内外で書かれる。内容は荒垣氏自身が著書「新聞の片隅の言葉」のあとがきに〃時評の歳時記〃と書いておられるように、国内国外の政治問題、社会問題から季節にちなんだ話題に至るまで範囲は多方面に渡って自由に書かれている。

普通新聞にはどんな短い記事にも見出しがついているが「天声人語」にはない。単に、「天に声あり、人をして語らしむ」という意味の西村天因氏によって名付けられた「天声人語」の四字が、横書きにされているだけである。

私の調査した結果によれば、文中には平均八つの▼印がある。それについて荒垣氏は氏の編集された書「朝日新聞の自画像」の〃「天声人語」―片隅のつぶやき〃という章で次の様にいっておられる。

誰が発明したか知らぬが重宝なもので、これを踏み台にして論理を運ばせる。文中に一字の空白もなく行もかえないのは読みにくいものだが、この▼印の折目節目で語の運びがよくなる。

続けて内容について

何分にも原稿用紙にして二枚、八百字内外の短文だから、複雑な世事万端について、情理を尽くして書くことはむつかしい。四畳半で長刀を振り回してるようなもので、

論理の〝四箇五入〟に陥り易く、ぼくのような凡クラ記者には、意余って舌足らずに終る憾みが多い。

と、天声人語氏流の書き方で諧謔している。

「天声人語」は荒垣氏により、論説委員の部屋で、十五字詰、六行の原稿用紙に書かれる。

毎日とにかく一つは玉子を生まねばならぬ因果なレグホン鶏のコラムニストにとっては、病気などをする暇はない。（中略）「幾日分も書き溜めをするのか」とよく聞かれることがある。まずそんなことはない。人並みに日曜日を休むために、土曜日に二日分書くくらいが関の山である。（〝「天声人語」―片隅のつぶやき〟）

ということだが、一日も欠かさずとなると、タネがつきるのではないかという心配が起きてくるがそれについては、

ぼくは折にふれて花や鳥など、季節ものを書くことがある。これが案外な反響を呼ぶのに、いつも驚かされる。（中略）もっとも、正面に白状すると、タネのない時、テーマに窮して季節の随筆で辛うじて欄を埋めることもあるのだが……。

と、書いてある。

「天声人語」欄を見て▼印の次に目につくものは、カタカナの多いことと、〝……〟の多いことである。最近は他の書物や新聞記事でも、普通平仮名や漢字で書かれるものを、カタカナで書かれることが多くなったようだ。

〝……〟は執筆者自身が作ったシャレ的要素を含むいいまわしが多い。それらについては、本論で詳しく書くことにする。

本論

第一章　「天声人語」の文章表現

文章表現を調べることは、書いた人の文章の特徴を知る第一段階である。外形的特徴がわかると同時に、文のリズムやテンポがわかり、思惟発展形式を理解する基礎となる。

第一節

Ⓐ、文形式の研究方法

まず「天声人語」の形式的特徴を知るために次のような事柄を調べていった。

1　字数　　6　カタカナ
2　文数　　7　表記記号
3　文の長短　　8　特殊用語
4　▼印　　9　接続詞とその用法
5　漢字の使用頻度

これらについて、詳しくは第二節で述べるが表にすると大体次頁のようになる。（a表）

Ⓑ、調査方法について

調査の対象としては、昭和三十四年六月二十二日から八月三十一日までの朝日新聞朝刊第一面最下段の「天声人語」欄七十一日分をスクラップした。その他に比較対象するために同じような種類のコラムと

a 表

月日	総字数	総行数	▼の数	▼一つの平均字数	総文数	一文の平均字数	漢字数	漢字の使用頻度	カタカナ使用回数
								%	
6.22	876	60	7	125.1	22	39.8	405	46.3	5
25	906	62	7	129.4	24	37.8	369	40.7	16
28	879	61	8	109.8	18	43.1	295	33.6	12
7. 1	875	61	7	125	23	38.0	245	27.9	19
4	853	59	8	106.6	20	42.7	304	35.6	19
7	865	60	7	123.5	21	41.2	313	36.2	2
10	900	62	7	128.5	29	31.0	314	34.9	13
13	864	61	7	123.4	19	45.5	304	35.2	30
16	882	61	9	98	28	31.5	277	31.4	13
19	861	59	8	107.6	23	37.4	304	35.3	8
22	843	58	8	105.6	19	44.4	308	36.5	9
25	808	56	6	134.7	22	36.7	236	29.2	34
28	908	63	8	113.5	29	31.3	371	40.9	18
31	874	60	9	97.1	28	31.2	358	41.0	6
8. 3	915	63	8	114.3	23	39.8	352	38.5	8
6	863	60	8	107.8	20	43.2	365	42.3	8
9	933	64	8	116.6	21	44.4	286	31.7	25
12	794	54	6	132.3	21	37.8	289	36.6	5
15	876	60	8	109.5	32	27.4	290	33.1	2
18	867	60	8	108.3	20	42.4	302	34.8	13
21	858	59	6	143	14	61.3	261	30.4	10
24	883	61	7	126.1	20	44.2	213	24.1	10
27	863	60	7	123.2	25	34.5	250	29.0	27
30	857	59	8	107.1	24	35.7	277	32.3	13
総計	20,903		180		540		7,293		
平均	871		7.5	116.1	22.5	38.7	303.9	34.9	13

いえる、

読売新聞「編集手帳」、神戸新聞「正平調」、毎日新聞「余録」の、それぞれ八月二十四日から八月三十一日まで八日間の分をスクラップした。

次にその調査方法であるが、総字数は、一行十五字から成っているので、十五×行数とし、、、。、・・、?、▼、その他記号類は全部含めた。総文数で、「」内にある。は文の分れ目とはしなかった。例えば短歌の、

「あいつぎて友は逝きたり日本のたのしき時に逢うことなくて。

窪田章一郎」。

という場合は一文として数えた。

一文の字数を数える場合、▼の前の文章の最後には。がないので、次の文との間にある▼を。の代りとして文の終りとみた。

a表には、その九項目については毎日調べる必要がないとして、二日おきに調べたものだけを書いた。

第二節

1 字数

書かれる紙面の場所が毎日決まっているので、総字数は自ら一定範囲内に定まり、大差はない。

b 表

		月日	総字数	行数	文数
読売新聞	編集手帳	8.24	807	57	11
		8.25	801	56	16
		8.26	803	56	14
		8.27	794	56	16
		8.28	798	56	15
		8.29	803	56	17
		8.30	796	56	18
		8.31	834	58	16
神戸新聞	正平調	8.24	900	62	16
		8.25	894	62	21
		8.26	879	61	15
		8.27	857	59	18
		8.28	888	61	13
		8.29	867	60	21
		8.30	904	62	17
		8.31	893	62	29
毎日新聞	余録	8.24	780	58	24
		8.25	782	58	25
		8.26	812	60	24
		8.27	790	58	24
		8.28	812	59	24
		8.29	790	58	25
		8.30	804	59	25
		8.31	800	50	23

a表でわかるように、少ない日には七九四字、多い日には九三三字というのがあり、一日平均にすると八七一字である。

これを、比較してみるために他の新聞におけるコラムについて調べてみると、b表のようになる。

大体このような結果であるが、もっとわかりやすくするため、「天声人語」とこれらを平均したものを表にするとc表のようになる。

c　表

新聞名	コラム名	総字数	1行の字数	行数	平均文数	1文の平均字数
読売	編集手帳	804.5	15	58.4	11.8	69.0
神戸	正平調	885.3	15	61.1	18.9	46.8
毎日	余録	796.3	14	57.5	24.3	32.8
朝日	天声人語	871	15	58.0	22.5	38.7

これによってわかることは、「天声人語」は他のコラムと比して形態上からいって、何ら特別変ったところはない、絶えずトータルの中間に位置しているということである。それでいて私達が読む時に何かしら変った印象を受けるのは、これ以外のことが原因であるようだ。c表の一文の平均字数の欄を見ると、その一端をのぞくことが出来る。新聞紙面の同じような場所に同じような面積で位置し、一見同じような書き方がなされているように見えるが、その文体には一文の平均字数を見ただけでも大きな開きがあることがわかる。結局それが文体の個人差である。

波多野完治氏によれば、センテンスの長さは、大体

新聞記事では……八六・一字

論文では……六〇・五字

小説では……三四・五字

である。「天声人語」だけでなく一般のコラムは、いわゆる新聞記事の典型的なものではなく、小説よりやや長い文章で書かれているといえそうである。

2　文数

毎日同じ位の紙に同じ人によって書かれた文章であるのに、文の数には大きな開きがある。a表によって解るように、多い時では三二文、少ない時で一四文であるから、多い時は少ない時の倍以上の文の数で構成されているわけだ。これは日によって書く時の心理状態が異なることの現れであろうか。

3　文の長短

日によって、又同じ日でも文の長さが色々であることは当然すぎる程当然なのであるが、「天声人語」ではその振幅が非常に大きい。一

6/22	6/28	7/4	7/10	7/16	7/22	7/28
29	35	50	—18	1426	69	4315
16	65	51	2423	—31	—	3921
42	—	—	3229	1829	67	—17
36	63	85	4244	52—	46	4546
—	50	48	—	2112	—	6422
34	—	—	4430	—30	37	27—
61	57	36	1134	2115	34	—33
44	84	46	3271	2227	36	2168
—	—	—	32	5526	23	56—
17	26	49	—	—	—	28
70	42	32	22	32	51	14
32	40	—	23	33	61	31
—	—	51	15	20	31	38
62	51	38	22	—	—	—
41	25	—	27	40	43	36
33	—	62	30	32	43	15
—	34	34	—	—	28	16
21	82	—	24	49	—	14
39	—	19	39	47	34	35
50	37	15	38	37	54	—
—	75	15	64	—	—	16
18	—	32	—	34	38	46
44	13	39	19	57	61	15
45	19	—	35	—	—	31
—	80	38	12	18	43	29
66		82	47	42	43	—
32		31	17	22		27
41						

8/3	8/9	8/15	8/21	8/27
2133	5722	−37	35	6325
5253	79	188	12	−22
—	—	1535	62	4419
37	48	2144	—	6030
90	50	30—	24	25
—	22	3713	47	—
15	—	−36	104	20
51	41	2324	—	37
54	66	3833	116	35
—	—	26—	81	51
16	52	26 9	—	—
55	65	3032	37	29
26	—	33	36	25
48	42	—	94	44
—	38	23	—	—
58	21	21	94	37
47	—	35	—	40
41	23	—	77	45
17	24	25	39	21
—	33	36		—
43	39	22		15
48	—	22		28
—	58	24		26
43	47	—		42
27	52	36		39
41	—	36		—
—	53	15		58

つ一つの文についてその字数を調べると次のようになる。二行にわたるものは、文の数が多いことである。一は▼印の代りである。

というように長短入り乱れているが、

長い文の例としては、

目的は〃政府機関のPRの総合調整と施策の宣伝〃で、実際には出版物を流したり、テレビ、ラジオのスポンサーになるわけだが、与党がいろいろPR活動をやっているその上に政府独自のPRとはいったいどういう代物なのか。（八月二十一日、一〇四字）

そしてこの続きである、

政府自身は放送施設を持たないから、民間の時間を買うことになろうが、それはよいとしても、放送のやり方や内容が問題で、政府の寛見か与党の寛見か分らぬものや、ナレアイ語のようなものを聞かされるのでは、それこそ広報に使われる税金がむくれる。（八月二十一日、一一六字）

短い文の例としては、

○政治は悲しかった。（八月十五日、九字）

○やめる気はないらしい。（七月十日、一一字）

○あれから十四年。（八月十五日、八字）

美しい文章は文の長短の差がはげしく、リズムがあるといわれるから、これも「現代の名文」といわれる所以だろうか。

4　▼印について

「天声人語」には毎日いくつかの▼印が文章の間にはさまっている。

まずその数であるが、最低六つ、最も多い日で九つというほんの限られた範囲である。平均すると一日七・五個の割合になる。

ところで▼は色々な意味をもっている。

○接続詞的役割をもつもの、

（前略）その破廉恥な前歴を知らなかったにせよ、知っていたにせよ、ネコにカツオブシをあずけ、オオカミに羊の番をさせたようなものだ▼その人間に理事長らがハンコをあずけっぱなしにして、金の出し入れも佐藤一人の自由にまかせただけでなく、五年間にわたって、ただの一度も監督も会計報告もしなかったという。（後略）（八月二十九日）

これなどは「しかも」に置きかえられる。

（前略）日比谷公園、芝園、上野公園のさんたんたる現状を見れば、都には公園管理の資格のないことが分ろう▼公園の樹木はスキスキになる、広場は野球場になってホコリが舞い上る、池は埋めるといった調子だ。（後略）（八月二十日）

これは「例えば」に置きかえられる。

（前略）海水も危険なので、貴重な真水と中性洗剤を使って船体を洗った▼その措置がよかったせいか、東京港に帰った時、放射能はほとんど認められず……（後略）（八月六日）

これは接続詞「すると」に置きかえられる例である。

○行かえの意味をもつもの

例（前略）アメリカのアパートに住み、シナ料理を食い、日本の女を妻にしたら、人生最上だという〃国際的伝説〃がある。この場合の評価は日本女性が美人だということではなさそうである。（中略）男性にかしずく日本女性の従順さ、古風なしとやかさをいったものらしい▼今日の美人の判定はきわめて数字的である。（後略）

（七月二十七日）

例（前略）ニューヨークやシカゴの下町では、猛暑の日には、海にも行けない子供達のために、特定の区域を交通止めにし、警官と消防夫が立ち会って消火センを開け、子供達に水浴びをさせる。その水を止められたといって、少年たちが屋上から火炎ビンを投げたり、消防夫を袋だたきにしたという▼中国では華南が豪雨と大洪水、華北が大干ばつという天候異変をきたしている。（後略）（七月四日）

○間の意味を持つもの

例（前略）……同主将はこう言った。「この前ケンブリッジも大変歓迎されたそうで、日本はホスピタリティ（もてなし）の精神に富んでいると聞く」▼「その国風にさからいたくはないが……（後略）（八月二十五日）

例（前略）林さんは気がついて直ぐ届けたのだが、拾った日からは十八日たっていた▼が、拾った時はまだ抽選前だ。（後略）（八月二十六日）

これとても接続詞を置くことも考えられる。又間としての意味をもつものをみていくと、別に▼を置く必要がないと思われるものが少なくない。そこに▼がないとそのブロックが長くなりすぎるので置いたと思われるふしがある。見た目に整然としていて読んで文章のリズムやテムポを整える役割を果しているということはいえると思う。

他の新聞で▼と同じように使われている例を見ると、

読売新聞「編集手帳」……◆

神戸新聞「正平調」……▽

毎日新聞「余録」……▲

これがちがうからといって、それぞれ意味がちがうというわけでもないが、▽よりは▼の方が目立つので使った意味があると思う。「正平調」欄を見ると▽はどこにあるかと、探さないと分らない位だ。

▼によって区切られている一ブロックは大体いくつの文章によって成っているかを調べると、

一つの文章で成るもの	四
二つの文章で成るもの	六十四
三つの文章で成るもの	六十
四つの文章で成るもの	三十四
五つの文章で成るもの	十九
六つの文章で成るもの	一

（六月二十二日から八月三十一日までを二日おきに調べたものである。）

となり、二つと三つの文章から成るものが全体の五二％を占めている。

5　漢字の使用頻度

a表によってわかるように、一日平均三〇四の漢字が使用されていて、総字数の三五％を占めている。少ないもので二四％、多いもので四六％であるが、多いものと少ないもののベスト五をみると、次頁のようになる。頻度の高いものでは日本のことが話題にとりあげられ、低いものでは外国のことが取り上げられているのはうなづける。

6　カタカナ

漢字使用頻度の高いものベスト5			
①	6月22日	46.3%	芦田均氏の死
②	8月6日	42.3%	放射能を受けた2船
③	7月31日	41.0%	水中騎馬戦
④	7月28日	40.9%	日本人の食べ物
⑤	6月25日	40.7%	競輪の八百長騒ぎと廃止

漢字使用頻度の低いものベスト5			
①	8月24日	24.1%	アメリカの農民一年休暇論
②	7月1日	27.9%	子供の危限な遊ぶ
③	8月27日	29.0%	オックスフォード大学クルー
④	7月25日	29.2%	アフリカ独立諸国共同体
⑤	8月21日	30.4%	政府のPR活動

「天声人語」のカタカナ表現は一見して多いとがわかる。ただ多いだけでなくその使い方が変っていて、外来語、外国の地名、人名をのけたものが全体の三分の一を占める。カタカナ表現全体では一日平均a表でわかるように一三である。

○外国の地名、人名

地名例…サハラ、アルジェリア、ガーナ、ギニア

人名例…アイゼンハワー、アデナウアー、マクミラン、フルシチョフ

等、表現に特徴のよく表れそうなのを取り上げてみた。サハラがサワラとなるような書き方の変化した例はなかった。

「アイゼンハワー」は「アイク」、「アイゼンハワーさん」、「アイさん」、そして「フルシチョフ」は「フルシチョフさん」「フルさん」等とも書かれていた。

○外来語

例…ヒロイック、ポーカー・フェイス、メニュー、グラウンド、ウイルス、マッカーシズム、ソーク・ワクチン、テーマ、PR、PTA

その他沢山ある。日本語化していない外国語を生のまま取り入れたものはほとんどなく、

ストロング・ガバナー

車がパークしている

位がいおうと思えばいえる程度で、

ルーム・クーラー（冷房機）ハウス・ナンバー（家屋番号）

というように（）の中に日本語訳が書いてある例が見られた。しかしこれ等別に訳して書く必要がないのではなかろうか。

○擬声語、擬態語

本来は平仮名で書かれた擬声語や擬態語をカタカナ書きにするのは「天声人語」だけでなく、他の少しくだけた文章に多くなってきたようである。

擬声語

チリンチリン、ワッショイワッショイ、

擬態語

ドッと、ホッと、（ッと型）
ゴチャゴチャ、モタモタ、バラバラ、ブヨブヨ、スキスキ、ギリギリ、ズタズタ、（くりかえし型）
サッパリ、ピックリ、アッサリ、ハッキリ、スッキリ、（ッリ型）
ムリヤリ、メチャクチャ、チグハグ、ウヤムヤ、（変型くりかえし）
ゴッチャ、スッカラカン、ザラに、ザックバラン（その他の型）

○その他

漢語、倭語その他で、漢字で書くべきものをカタカナで書いたものが多い。
バクチ、トバク、コショウ、ヤケクソ、バカ、イモ、ウズ、ヒザ、キズ、
中には一部分をカタカナで書き、他の部分を漢字や平仮名で書いてあるものもあり、それが案外多い。
干バツ、大ブロシキ、油アゲ、消火セン、火炎ビン、宝クジ、補助イス、
カッ払い、カラ梅雨、ブタ汁、ドン官汚吏、ナベ底、ヤミ米、インギン無礼

7　他の変記記号

前述の▼の他に次のような表記記号が使われている。
〃、〃については省略する。
「天声人語」では〃〃の使用が著しいので少しくわしく調べてみた。

調査の対象としたものは六月二十二日から八月三十一日までの全部の〃〃の中に表れた表現である。大変興味深く、又、本論に全部を載せた方がわかりやすいのであるが、沢山あり、頁数を食うので資料篇に載せることにした。

一日に出てくる回数は

一回も出て来ない日…八日間　六回〃　……四日間
一回出てくる日……十四日間　七回〃　……四日間
二回〃　……十日間　八回〃　……四日間
三回〃　……六日間　九回〃　……一日間
四回〃　……六日間　十回以上出てくる日…四日間
五回〃　……五日間

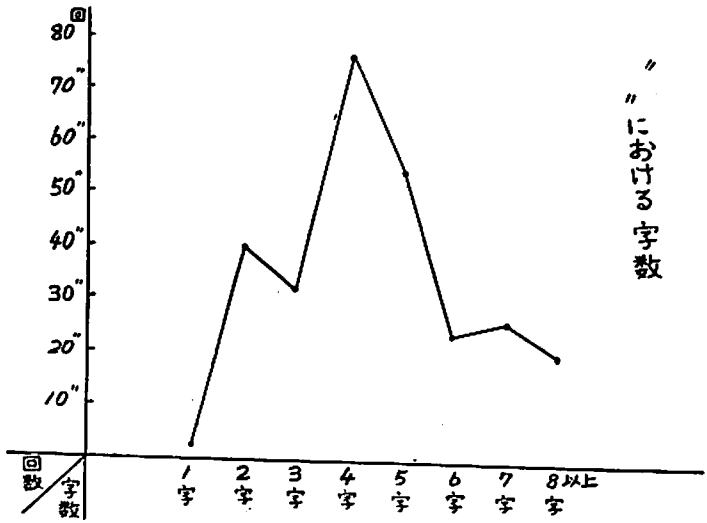
で、一日平均ちょうど一回である。

一回に使われる字数は

一字のもの…二回　五字のもの…五十五回
二字のもの…四十回　六字のもの…二十四回
三字のもの…三十二回　七字のもの…二十七回
四字のもの…七十六回　八字以上のもの…二十一回

で、グラフに表わすと次頁のようになる。一字のものは〃秋〃とか〃敵〃といった漢字一字である。二字のものが三字のより多いのは、漢字二字の語が多いためで、調べたもののほとんど全部がこの類である。

二字の例…防衛、脱走、飼育、個人
三字の例…品定め、白タク、見せる、水めし、婦系図、教育者
四字、五字になると複合語が多くなる。



例…人間不在、公開投査、行政干渉、迷宮番地、頑法精神、国粋的美風、月給二倍論、敗戦記念日

又、助詞のつくものが出てくる。

例…地の果て、何のため、一つの真実、玉にキズ

六字以上になるとうんと少なく、

日米安保条約改定反対

政府機関のPRの総合調整と施策の宣伝

というようなのもあるが十字以上になるとほとんどが、〃〃が二か三つ合わさったようなものとか、直接話法、間接話法のものである。

例…〃無免許、酔っぱらい、ひき逃げ〃

〃魚は山中より早いからね〃

〃私はあなた、あなたは私〃

〃名門は消えず、去り行くのみ〃

〃飼う人間を造りかえれば鶏も自然によくなる〃

長いものでは、

〃おーた、やったぞなもし、ようやってくれたぞなもし。なんちうても、あのガイな粘りが物を言いますらい〃

と四十八語が〃〃の中に一度に入っているのもある。

字数から分類すると以上のようになるが、〃〃に入れた意味から分類すると次のようになる。

a 流行語　d 個性ある表現

b 新語　e 特殊表現

c きのきいた表現　f 注意喚起

これらは・・の中に書かれたものだけを見てもわからないのであって、前後を読まないとシャレ的に使われたものも当り前のことばのように見える。

又、はっきりと分類することもむつかしく、例えばcにも入るがdとも取れるというようなのがほとんどで、いくらか主観的になりやすいので、どれが多いかといった統計を取ってみるのはやめにした。aとbの区別はいくらか似かよった点がありむつかしいが、流行語は今までにもあった語だがことさらよく使われているもの、新語は今までになかった表現の語としたが「天声人語」ではどちらも少ない。

c、d、eの分け方は、cはきのきいたいい方、シャレ的ないい方をしたもの、dは個性ある表現でcほどくだけてはいないがシャレ的要素をもち、他にも色々表現方法があるのに自分で創作したようないい方、紙面の関係上短い言葉で表現したいために用いられたようないい方のものもある。eは特殊表現でc、dと似ているがもっと真面目な時に使われるもの。そしてfは注意、喚起、普通「」によってもよく表現されるものである。

aの例

女がいばるように・飼育・した西欧男性のくやしさの告白とも見える。

bの例…・神武景気・

cの例

青菜を食わぬと、ビタミン、ミネラル不足で人間の方が・青菜に塩・になりかねない。

dの例

安保条約改定にしても、改定について考えてみるための資料をPRするなら分るが、政府の一方的な考え方で、国民の頭を・総合調整・されるのでは、やりきれたものじゃない

eの例

・広島・から十四年、人知の進歩は目覚しい

fの例

それでも・脚線美・の点では・大根脚・や・ガニまた・からオイソレと脱却しきれない

「 」

これは・・と混同して使われる傾向があるが、大体・・のfとしてあげたもの、つまり注意喚起の役割をしているもの、それから人のいった言葉を「」に入れたものが多い。

外国語の綴りを略して頭文字をとり、それが慣用化したもの

PR、PTA、IRBM、など

活字の小さいもので二行にまたがるもの

[illegible]、%、・など単位を表わすものが多い。

その他、%、?、…、()、・などがある。

8 特殊用語

執筆者の創作語と思われるもの

組合型教師、九合目会談、あばれ貨、迷宮番地、出産基準

これらは・・内に表現されたものが多い。

執筆者の創作と見られる略語

ベ・ア要求、ヘリ（ヘリコプターの意）

変った表現

税金がむくれる

ラチもないガラッパチ

スキスキになる（隙間が多くなるの意）

不当な寛大さ

9　接続詞とその用法

接続詞には文頭に位置するものと、文中に位置するものとがあるが、ここでは文章の発展形式、及び文と文との関連性を追求する目的から、文中にある接続詞については省略した。

又純粋の接続詞だけでなく、接続詞的に用いられた語句をも含めて研究した。

私が調べた六月二十二日から八月三十一日までは一日平均二回しか接続詞が使われていない。これはもっと調査日数を増したところで大差はないと思う。普通の文章にどの位接続詞が使われるものか調べたものが見あたらなかったので、比較出来ないが、それにしても文頭の接続詞だけとはいえ、少ないといえるのではなかろうか。接続詞が少ないということは、紙面の関係と共に、新聞の文章独特のテムポの早さを表わしている。又接続詞の中では「が」というのが約三分の一で、他は沢山の接続詞が、調べた七十一日間に二回づつ位しか出てこない。新聞の文章には「が」という色々な意味にとれる接続詞が多いが、ここではそれが如実に表れている。

「天声人語」における接続詞を次のように七つに分けた。

①並列的接続詞……また

②添加的接続詞……そして、しかも、さらに、おまけに

③選択的及限定的接続詞……むしろ、ことに

④順態接続詞……これでは、だから

⑤逆態接続詞……が、そうかといって、もちろん、それでも、さりとて

例…もちろん、こんなのが当世若者気質の一般的傾向ではあるまい。（七月十八日）

例…それでも〝胸線美〟の点では〝大根脚〟や〝ガニまた〟からオイソレと脱却しきれない。

⑥転換的接続詞……それにしても、ところで、とにかく、いずれにしても

が　例…が、これは伊豆に限ったことではない。（六月二十日）

やはり　例…やはり、教育内容について深く思いをいたす〝静かな姿勢〟を望みたい。（七月七日）

さて　例…さて衝路の名前だが……（後略）（八月十七日）

そもそも　例…そもそも抑留そのものが不当である。（七月十九日）

いったい　例…いったい、免許権を陸運局が一手に握っているのはおかしい。（七月十四日）

もっとも　例…もっとも、当日は台風の余波で波が荒く……（後略）（七月十八日）

⑦説明的接続詞

つまり　例…つまり犯跡をくらます方法でもある。（八月十八日）

いわば　例…いわば〝ニュースの噴出時代〟のような様相を呈し（後略）（七月十三日）

大体以上の如くであるが、「が」の他は非常に種類が多く、かたよっ

て使われていないのは特筆すべきだ。

▼印の次に接続詞が来るものもあるが、▼印が接続詞の役割をしているものもあることは▼印の所で述べた通りである。

第二章　文章表現と思惟形式

ここでは文章表現から更に発展してそれらを総括的に見て、文章に表れた思惟の発展形式を調べた。

第一節　文章のリズム

文章にはリズムがある。そのリズムを科学的に調べるための一方法として文の字数によるグラフを作った。

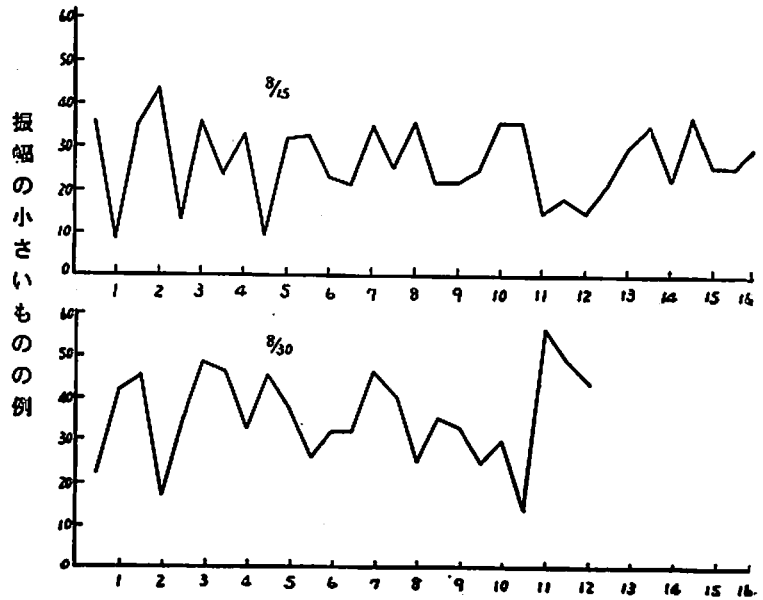
調査期間は六月二十二日から八月三十一日までを二日おきに。そして方法は一日毎に一文の字数をはじめから順に取り、折れ線グラフにして波の振幅や形を見た。しかしその種類が多岐にわたり、大体これとこれに分けられるときめてしまうことは出来なかった。一つのグラフを見ても、取り上げられた話題の種類によってそのようになったのか、くだけた文体であるその程度によってなったのか、その話題に対する執筆者の興味の度合からなったのか、その日の感情状態によってなったのか、そのような点が入り乱れて出来上っているのだから複雑である。

いくつかの形式に分けて全体をそれぞれにあてはめ、入れることは無理なようであるから、それぞれ典型的なもののパターンをとり上げることにする。

まず、振幅の大きいものと小さいものである。

振幅の小さいものの例(1)

「あいつぎて友は逝きたり日本のたのしき時に逢うことなくて。酉田章一郎」。あれから十四年。敗戦のころは今日ほどの豊かな日本になると予想した人はほとんどなかった。それを見ないで、戦中戦後の苦しい時代に、食う物も食えずに死んだ人々はほんとうに気の毒だ▼きょう十五日はお盆である。「亡き子来て神ひるがへしこぐと思ふ月白き夜の庭のブランコ。五島美代子」。子や父や夫や妻を、いくさの犠牲で失った人は多い。その精霊を迎えるお盆でもある▼敗戦は悲しかった。が、その悲哀と苦悩の底には、一脈の地下水が喜びの音をたてていた。「敗戦を俺は喜ぶこの日から圧制の鎖が断ち切られたのだ。渡辺頭三」▼敗戦のなかから新しい民族の生命が生まれてきた。廃墟のなかにも民族興隆の力がひそんでいた。「人間復興のうちけし難きこゝろありぬそのこゝろなりと審判せしは。香川進」▼食物も乏しく、一家バラバラの疎開生活はわびしかった。「命ひとつ露にまみれて野をゆく淵なきものを追ふごとくにも。太田水穂」。今は食う物も着る物も店頭に山と積まれている。が、今もなお生活苦ゆえの母子心中は絶えない。そこにはまだまだ〝戦後〟は尾をひいて続いている▼「己れ自身を何とや思ふことごとに大君のかげによりてものいふ。矢代東村」。そうした古いものは滅びて、自由、民主主義はまっしぐらに急速に成長した。が、根浅し草のうらみもあった▼民主主義にも後退の兆しがなくはない。民主政治は遅々として進まない。政治には思想が乏しく、政党には理想がない。その貧しい政治のあり方を選ぶ者も、ほかならぬ国民自身なのだ。「ゆたかなる土壌に育たざりしこの国の思想の貧せをわれらみなもつ。五島茂」▼「貧ひ足りて今宵は思ふいにしへよりいくさとゞめ得し神のありきや。小暮敬次」。が、今や〝戦後は終ったか〟よりも、再び次の〝戦前〟にしてはならぬことである。いくさをとゞめる神を創造しなければならぬ世紀である。戦争さえなければ、人類には大いなる未来がひらける。「晩天の星に夢みて宇宙翔ける少年等か嗚乎二十一世



紀。大岡博」（八月十五日）

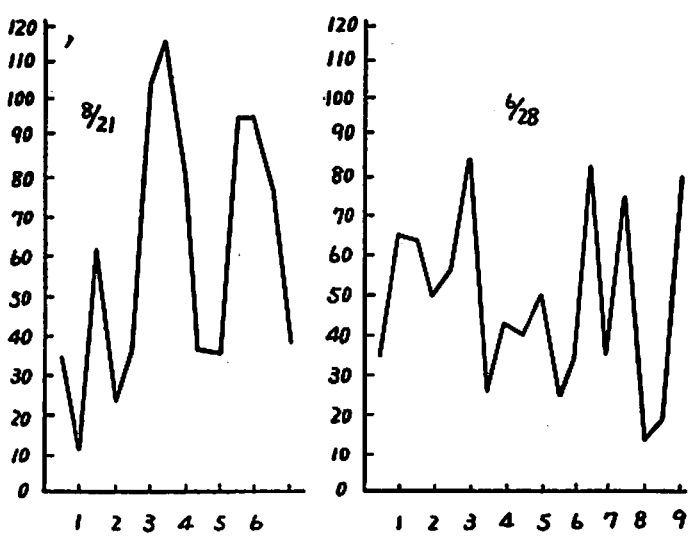
振幅の小さいものの例(2)

皇居の開放問題もだんだん話が具体化してきた。東地区約三十三万平方㍍は皇居の付属庭園として宮内庁が管理し、昼だけ開放しようという。皇居造営審議会の小委員会はそのような結論を出し、審議会にも大筋ではあまり反対がないようだ▼とにかく東京都には渡さぬ方がよい。今までの実績からみても、都などに任せたら何をされるか知れたものでない。日比谷公園、芝公園、上野公園のさんたん現状を見れば、都には公園管理の資格のないことが分かろう▼公園の樹木はスキスキになる、広場は野球場になってホコリが舞い上る、池は埋めるといった調子だ。東地区も都の手に渡したら、由緒のあるホリまで埋立てないとは限らぬ▼明治神宮外苑の青い芝生の広場も感じのよいものだったが、いつの間にか野球場になってしまった。都内の広場という広場を片っぱしから野球のグラウンドにするのは悪い癖である。公園は緑の深い静かな憩いの場所にしなければいけない▼皇居東地区に児童施設をと願っていた人々はがっかりしているようだ。が、それはここに隣接する北丸地区、千鳥ケ淵付近にしたらよかろう。皇居造営審議会はこの地区の解放を勧告するらしいが、その利用法もあわせて勧告したらよいと思う▼東地区には旧本丸跡や平河門、富士見ヤグラ、石ガキ、ホリなど文化財的な史跡が多い。これらを配して江戸城時代の古園を復元したいという。今の景観を保存しながら、民主公園としての近代味を添えるのは賛成である▼民主化、大衆化とは、ラチもないガラッパチの公園にすることではない。観光バスがぞうぞろ乗りこんだりしてはぶちこわしだ。ロンドンの夜のハイドパークのような野合の場所にもしたくない。昼だけの開放もやむを得まい▼せっかく開放されるのを機会に、世界にも誇り、国民も自慢のタネに出来るだけの、純純高雅な典型的公園にしたいものだ。が、宮内庁だけの管理では、とかく皇室中心の考え方に傾き、国民公園の意義が二の次にされる懸念もある。それには民間有識者も入れた運営委員会を設けて、民主

化の大節をそれぬようにしたらよかろう。（八月二十日）

振幅の大きいものの例(1)

〝なんだあれは宣伝じゃないか〟といわれては、折角の宣伝も台なしである。これは下手な宣伝に多い。やり方が過大で見え過いていたり、押しつけがましかったり、内容が貧弱で面白おかしくもないか、またかと思われるお説教のたぐいだ▼政府は、いよいよ本腰でPR活動を開始するという。そのために内閣広報室を〝広報局〟に昇格し、経費も一挙に今までの十五倍の十五億円を見込んでいる。目的は〝政府機関のPRの総合調整と施策の宣伝〟で、実際には出版物を流したり、テレビ、ラジオのスポンサーになるわけだが、与党がいろいろPR活動をやっている、その上に政府独自のPRとはいったいどういう代物なのか▼政府自身は放送施設を持たないから、民放の時間を買うことになろうが、それはよいとしても、放送のやり方や内容が問題で、政府の意見か与党の意見か分らぬものや、ナレアイ話のようなものを聞かされるのでは、それこそ広報に使われる税金がむくれる。安保条約改定にしても、改定について考えて見るための資料をPRするなら分るが、政府の一方的な考えで、国民の頭を〝総合調整〟されるのは、やりきれたものじゃない▼〝よらしむべし知らしむべからず〟の返り咲きが心配されても致し方なかろう。なるほどこんどの案は〝情報収集〟は一切やらないとはっきり念を押している。これはかつての内閣情報局再現と見られないための深慮からだろうが、オタマジャクシの防衛組織をいつの間にかカエルにし、さらにもっと大きくしかねない政府への不信が、どうもマユにツバをつけさせる▼いわんや広報局の後には、内閣調査室、公安調査庁が控えており、実際にまた強力な情報機関を作ろうという動きが政府部内にあったことを考えれば、しばらくはテイのいい〝分散戦術〟と見られなくもない▼安保改定反対運動を十ぱ一からげに〝アカ呼ばわり〟するようになっては、そりゃ聞こえませぬ広報局どころか、りっぱに戦前の思想統制への道に踏み込むことと相成る。PRをやるからには、どこまでも公平無



振幅の大きいものの例

私に、あくまでも客観的態度を忘れぬことだ。（八月二十一日）

振幅の大きいものの例(2)

月給が二倍になるとは総評そこのけの、うますぎる話で、俗耳に入りやすい。池田通産相の〝月給二倍論〟と岸首相の〝所得倍増論〟とがゴッチャになって、岸内閣の〝バイバイ・ゲーム〟が世間の話題をにぎわしている▼池田さんの〝月給二倍論〟は、まだ入閣する前の二月ごろの話で、関西財界との懇談会で大ブロシキをひろげたのがたちまち評判になった。そのご当人が通産大臣になったのだから、月給二倍も夢ではないと甘い期待を世間に与えるのも無理からぬ話▼そこへもってきて岸首相があいまいな表現で〝所得倍増論〟を唱えだしたので、いよいよ〝バイバイ内閣〟らしくなってきた。気の早いのは、二千円やそこらのベースアップはけちくさいとばかり大きな気になるし、サラリーマンの月給が二倍になるなら、国民所得をふやすために米価を上げろという声も出る▼もちろん、国民総所得と個々人の月給とは別問題である。去年一年間の国民総生産は十兆五千億円で、それこそ〝神武いらい〟史上最高を記録した。十年後にはそれが二倍になったからといって、賃金まで二倍になるというものではない▼国民が総体としてかせいだ総所得は、資本の蓄積や工場施設への投資や道路、住宅などの方にも回さねばならぬ。国民所得がそのまま個々人の賃金になるわけではない▼だから、国民所得倍増と月給二倍とをゴッチャにするのは大間違いである。そんなことは百も承知でいながら、なんとなく国民に誤まった空頼みを抱かせるようないい方をするのは、商品や土地売買のインチキ広告に類するもので〝政治の誇大広告〟である▼岸首相の国民〝所得倍増論〟も、具体的内容の何もない看板だけのスローガンである。これほど重要な施策をもっているなら、国会での所信表明で当然言うべきなのに、一言もそれにふれなかったのは、単なる思い付きていどのものだからではないのか▼政治はスローガンではない。スローガンを表現するものが政治なのだ。どのような段取りで実現に移すかという具体策も示さないで、人の喜びそうな場当りのスローガンだけを放言するのは、国民をたぶらかす無責任な人気とり政治というほかない。（六月二十八日）

これら二つずつを比較すると、振幅のはげしいものは振幅の小さいものより興奮して書かれている。振幅の小さいものは冷静に落ちついて物を見るような状態で書かれ、はじめから終りまで大体同じような調子で、重文的な文の連接形式が多い。振幅の大きいものはそこに取り上げられた話題に対する関心の度が高いといえるのではなかろうか。

又波の形から後高型、頭高型などを見ることが出来るが、それらに二分出来るわけではなく、かといって他に決った形があるわけでもない。

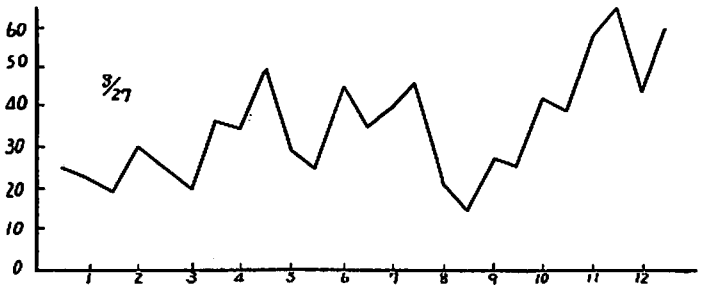
文章のやわらかさ、硬さは波に現れることはないと思われた。

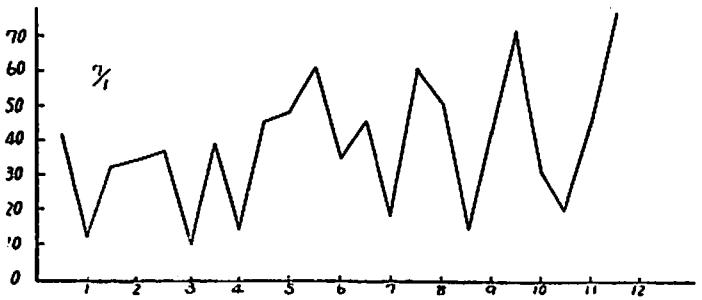
波に現れた型の傾向をつかむことによって文章のリズムを探ろうとしたが、傾向は現れなかった。このことは一面から見れば、色々な形で書かれているということである。

第二節　文末表現と文体

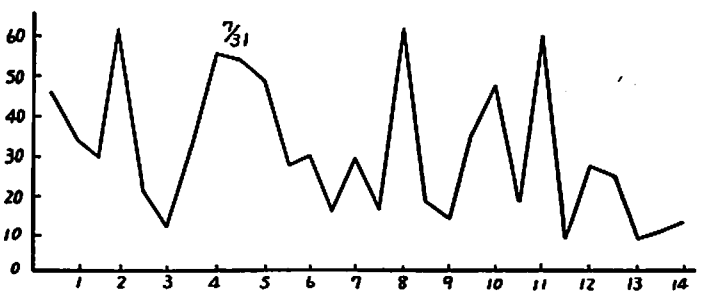
「文章はその用語の如何に由り、修飾の如何に由り、内容の如何により、作者の個性如何に由りて種々の文体を生ずる。」（日本文学大辞典「文体」欄）が、文末を見ればその文章の大体の文体がわかる。文末のいいまわしによって私達が文章を読む時、人の話を聞く時でもそうであるが、受ける印象がちがってくる。即ち文末表現によって直感的に文体の感じ、つまり硬い軟かいが感じ取られる。それ程文末表現と文体とは密接な関係にある。

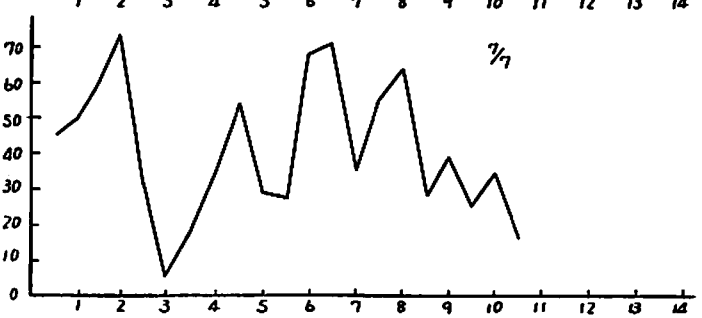
後高型の例


3/27
60
50
40
30
20
10
0
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12


7/1
70
60
50
40
30
20
10
0
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

頭高型の例


7/31
60
50
40
30
20
10
0
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14


7/7
70
60
50
40
30
20
10
0
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14

月日	る	い	た	だ	う	体言	か	ぬ	その他	計（文数）
6・22	1	1	17	1	0	2	0	0	0	22
25	5	4	8	5	0	1	1	0	0	24
28	6	5	3	1	6	1	0	1	1	18
7・1	8	5	0	2	0	0	0	0	1	23
4	4	5	3	3	4	0	0	0	0	20
7	7	7	2	2	2	0	0	0	1	21
10	15	8	3	2	0	0	0	0	1	29
13	7	2	1	7	2	0	0	0	0	19
16	10	6	6	2	3	2	1	0	0	28
19	6	6	4	3	3	1	0	0	0	23
22	4	5	5	1	1	1	2	0	0	19
25	11	3	3	1	1	3	0	0	0	23
28	14	9	4	4	2	0	1	0	0	29
31	6	5	3	5	3	2	0	0	1	28
8・3	8	1	2	1	5	0	4	2	0	23
6	5	1	7	3	0	2	0	0	2	20
9	6	3	4	6	0	0	1	0	1	21
12	7	6	3	2	0	2	0	1	0	21
15	7	5	8	2	3	1	0	0	9	32
18	7	6	3	1	3	0	1	0	0	20
21	6	3	0	5	2	0	0	0	1	14
24	8	3	1	5	1	1	0	0	1	25
27	11	6	1	3	3	0	0	0	1	24
30	3	7	2	5	6	0	1	1	0	30
計	168	106	96	68	47	20	15	6	19	

「天声人語」の文体は、新聞の文体を土台としてその上に荒垣氏自身の文体がにじみ出ているはずである。そして新聞の文体で書きながらも氏の文章を書く上でのくせというか、多く使われる用語が表面化してくるだろう。

ところでそれを具体的に追求する。

まず極めて形式的に文末の一字を調べて、表にすると次のようになる。（六月二十二日から八月三十一日までを二日おきに調べたもので何で終る字が多いかを調べたものである。）

「る」「い」「た」が圧倒的に多く、それぞれ、

「る」で終るもの……三一・一％

「い」　〃　……一九・六％

「た」　〃　……一七・八％

を占める。普通の新聞記事では

「る」で終る終止形…一七・四％

「い」で終る中止形…一七・二％

「た」で終る過去形…一五・一％

（「コトバの科学」5「コトバの美学」二〇四頁参照）

であるから、この三字で終るものが非常に多いことがわかる。

「る」……「である」が三分の一を占め、「ている」や動詞の終止形で終るものも多い。

「い」……形容詞の終止形、中でも「ない」が多く、助動詞の「ない」がそれに並ぶ。

「た」……全部過去。

「だ」……断定助動詞及び過去助動詞「だ」、伝聞助動詞「そうだ」、

様態助動詞「そうだ」、不確かな断定の助動詞「ようだ」などがある。

「か」……全部疑問

「ぬ」……全部文語の打消の助動詞「ず」の連体形である。

「う」……動詞「言う」、推量助動詞「う」がほとんどで、推量助動詞「う」は「だろう」「かろう」として使われるのが多い。

これらを総合的に見ると、色々な事件その他の出来事の報道からやや離れ、批評的客観的に、距離を置いて執筆者の意見や未来への推量・希望・観測等を述べたものが非常に多いといえる。それは現在形で終っているものが多いことでわかる。「である」という断定、形容詞の終止形の「い」、「だ」という断定などの肯定と共に「ない」「ぬ」という否定形についても同じである。過去形にしても事実の報道としてなら過去形が連なっているはずである。「天声人語」ではそのような箇所は少ないといってよい。

一口にいって「天声人語」は、作者的立場で個人的な態度で書かれていると考えられる。

第三節　文章の思惟形式

私達が文章を書く場合、あらかじめ大体の構成を考えて書く場合と、そうでなく行きあたりばったりに書く場合があり、又題材に対する表現意欲によっても思惟形式はちがうであろう。そこでこの章では「天声人語」の表現から思惟発展形式を研究して行きたい。

私の調べたところでは「天声人語」には、およそ次の様な思惟の発展形式がある。これは▼印によってつながれた一ブロック毎の発展から調べたものである。

④項目を並べておいて最後にそれをまとめたように結論を出す形式

例(1)　六月二十二日

①芦田均氏の死について……㈠

②政界へ出るまで

③平和憲法礼賛者から

再軍備論者に転換

④芦田内閣首班になったが昭電事件

⑤頭のよい見通しのきく人だった

⑥西欧的合理主義者だった

⑦老練円熟の国会政治家として

もっと活躍させたかった

㈡芦田氏の略歴

芦田氏の死去にあたって略歴や性格を述べておき〝もっと活躍させたかった人〟だといっている。

㈢芦田氏の性格と死に対する哀悼

例(2)　七月十日

①競倫はもうやめるべきだ

②競輪ファンには低劣な人間が多い

③競輪は八百長をやりやすい競技だ

④競輪ファンはギャンブルを楽しむ人種ではない

⑤競輪ファンは仕事をする意欲をもたない

㈠①の理由

⑥都道府県市町もあきらめきれない

⑦政府にやめる気がないらしいのは困る

㈡（結論）

競輪をやめるべき理由を述べておいて、〝それなのにやめようと

しないのはいけない。と結んでいる。

これらをみると、先にどのように書くか考えて書いたと思われる。

㋺結論的なことをいっておいてからそれに対する説明をする形式

例(1)　七月二十八日

①日本料理は日本人の好みには美味だが国際性はない……㈠

②栄養審議会のいう日本人の食糧構成について

③米飯はビタミン欠乏症の原因

④大人も子供に合せて米飯は一日一回にした方がよい

㈡米飯減量を奨励

⑤イモ類も大いに食えということだ

⑥高くて栄養の少ない白い野菜が喜ばれる

⑦このごろは夏も油脂類をとるようになった

⑧日本は「果物王国」の割に高価だ

㈢日本の食べ物の実状

これから次の事がいえる。

・結びの文句がない。

・㈢ではイモ類、淡色野菜、油脂類について並列的に述べている。

㈢は㈡の添加的要素をもち、㈡㈢が㈠の説明。

①②を㈠とも考えられる。そうとってもその後は説明である。

例(2)　八月二十八日

①看護婦の「出産制限」「出産割当期間」は人権の問題……㈠

②新潟での割当期間外だといって中絶をせまられた事件

③既婚看護婦の「出産基準」というおきてがあったそうだ

④出産時期も決めていたが割当外でこの問題になった

⑤看護婦間の自主的話合いによる

⑥病院側では知らぬ顔をしていた

⑦集団的出産時期の割振りは哀れがすぎる

⑧非人間的問題である

㈡

㋩話が転換して発展する形式

㋑㋺では話があまりロウリングしないが、これは一つの事件を種にしてある意見を述べるものが多い。

例　八月二十日

①台風七号の被害者に早く救援の手を　㈠

②今度の台風でヘリコプターが活躍した

③自衛隊ヘリコプターのピストン救助

④災害国日本ではヘリコプターが便利

⑤政界は戦闘機問題でさわいでいる

⑥戦闘機よりヘリコプターの方が重要

㈡ヘリコプターの必要性

⑦自衛隊の奉仕活動を育てよ　㈢

㋑㋺に比べるとずっと転換性が多い。まとめるために㈠㈡㈢としたが①から⑦へと頭に見る方が転換し展開していることがよくわかる。

㋑㋺㋩の三つの形式から次のことがいえるのではなかろうか。㋑は頭に秩序だって思惟が発展したもの。㋺は思いが先に立ったもの。㋩は書いているうちに思惟が変化するもの。「天声人語」では大体これらの形式、或いはこれらが融合した形で思惟が発展しているとみてよいだろう。

あとがき

「天声人語」に関して本論を大体まとめると、外形的な面では毎日同じ位の字数で書かれるコラムで、文は長短入り乱れている。一日約八つの▼印があり、行替えや話の運びに役立っている。カタカナ表現や・・内に表現されたものが多く、色々な面に使われている。文章の特徴としては、文体はやわらかく、文章のリズムの変化に富んでいる。思惟発展形式は凡そ三つに分けられる。

大体このようなことを研究したのであるが、はじめに相当間口を狭くしたつもりだったのに研究が進むにつれて意外に広かったことに気がついた。そのため自分の求めんとする所まで到達し得なかったことが残念でならない。しかし一つの事を深く研究するためには、その土台となるべき多くのことを知らねばならないから、私としては時間的にも能力的にもこの程度に落ちつくのかもしれない。

「天声人語」が毎日同じ位の字数で書かれているので、グラフによって文章のリズムの傾向をさぐることが出来た。もちろんグラフだけによって確実にわかるというのではなく、ほんの一面から一端を求め得たにすぎない。「天声人語」を毎日読むと文体にしろリズムにしろ抽象的にはわかるが、それを具体的に科学的に証明することはむづかしい。グラフは科学的に証明する一手段であることだけは認められるだろう。

文章研究の未開地ともいうべき思惟形式並びに思惟発展形式については、参考にすべき研究書が少なく、如何なる道に歩を進めると求める場所に達することが出来るかわからないため、やぶの中をかきわけて進まなければならないような有様であった。けれども同時にいえることは、それだけに自分の意のままに開拓出来ることで、そこに大きな希望と期待がある。そのような前途洋々たる分野を少しでも研究出来たことに喜びを感じる。

1 右の論文は、雑誌掲載のため一部分省略したことをおことわりする。

2 別に資料編としてまとめたものがあるが頁数の関係上省略する。

参考文献

1 国語学辞典（文章・文体・言語表現・マスコミ等の項）
2 文章心理学　波多野完治著
3 現代文章心理学（新聞の文体の項）
4 明治初期の新聞の用語（国立国語研究所）
5 朝日新聞縮刷版（四五六号、四五七号）
6 国語文体論序説　桑門俊成著
7 コトバの科学五（コトバの美学）
8 講座現代国語学（コトバの体系）
9 現代文章講座三（新聞記事の書き方）高山毅著
10 ことばの研究（新聞社説の文章と小説の文章）大久保愛著
11 文章講座Ⅶ（実用文の理論と方法）
12 甲南女子短期大学卒業研究報告　四、五、六号